

二〇一六年度活動記録

《シンポジウム》

- 立教大学文学部日本文学科／文学科日本文学専修設立60周年記念国際シンポジウム

「戦後の東アジアにおける日本語文学——移動・交流・支配——」

- 日時 二〇一六年六月十二日（日） 一三時～一八時三〇分

- 場所 立教大学池袋キャンパス太刀川記念館多目的ホール

- 内容

戦後の東アジアにおける日本語文学をめぐる諸問題に関して、特に各国や地域の移動と交流、支配／被支配という観点から問題編成を行い、講演、研究発表、全体討議などを交えた国際シンポジウムを通して思索と議論を深める。

- 基調講演

酒井直樹氏（コーネル大学比較文学科及びアジア学科教授）

- 研究発表

鄭炳浩（高麗大学教授）
鄭炳浩（高麗大学教授）
王成（清華大学教授）

王成（清華大学教授）

笹沼俊暁（台湾・東海大学副教授）

新城郁夫（琉球大学教授）

※共催…日本学研究所

●公開シンポジウム

「前近代東アジアにおける怪異と社会…テキスト・文化・自然環境」

- 日時 二〇一六年十二月十日（土） 一三時～一八時

- 場所 立教大学池袋キャンパス五号館五・二四教室

- 内容

本シンポジウムでは、前近代東アジア漢字文化圏の歴史社会において、異形のものや天変地異といった怪異現象がどのように発現し、機能し、そして社会に影響を与えたのか、またその社会の側が怪異現象をどのようにに規定し対処したのかについて、総合的な討議を行う。最初に日本中世、日本古代、朝鮮、中国、ベトナムの専門家が、それぞれの専門地域における漢文テキストに即した事例報告を行い、その後東アジア全体を見据えた討論に移行する。その際に講師陣が注目するのは、怪異が記録されたテキストそのもの、そのテキストの生産・流通・受容を可能にした背景としての文化、そしてそのような文化をも包摂する自然環境である。事例それ自体は前近代社会を対象とする本シンポジウムの射程は、合理的に理解し得ぬものや突如襲ってくる大規模自然災害になお苦慮しているわたしたちの生きる現代社会までも見据えている。時代・分野を問わず参加者の関心に訴えかける。（予約不要・入場無料）

- 演題・講師

「問題の所在」

小澤 実（立教大学文学部准教授）

「日本中世都市の秩序と怪異」

高谷知佳（京都大学大学院法学研究科准教授）

「蘇民将来札考——井戸跡出土木簡を手がかりに」

水口幹記（藤女子大学文学部准教授）

「怪異」の諸相——朝鮮前期を中心に」

野崎充彦（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

「災異と禳災のポリテクス」

佐々木聡（金沢学院大学文学部非常勤講師・日本学術振興会特別研究員PD）

「ベトナム李仁宗代の怪異をめぐって」

佐野愛子（国際日本文化研究センター共同研究員）

「環境文化史から怪異を問う——伝播論／環境還元論の止揚へ」

北條勝貴（上智大学文学部准教授）

《研究例会》

●第五十五回研究例会

「第二回 海外の日本文化研究——その動向と可能性——」

・日時 二〇一六年七月十六日（土） 一四時～一七時

・場所 立教大学池袋キャンパス五号館第一・二会議室

・内容

立教大学には多くの留学生が在籍し、スーパーグローバル大学（グローバル化牽引型）にも指定されており、研究の国際化や国際交流の中枢を担う大学として期待されている。しかしながら、本学の留学生の研究内容やその問題意識は、学生や教員間において必ずしも十分に共有されているとはいえない。そこで本例会では、今後海外において日本文化研究を推進していくであろう留学生たちによる研究発表を行う。海外各国における日本文化研究の動向や関心についても発表者による報告を行い、世界における日本文化研究の今後の方向性や可能性につ

いて議論したい。

・講師・演題

Oriane Guillemot (INALCO フランス国立東洋言語文化大学院生)

「『落窪物語』における笑いの方法」

逢雲霞（華東師範大学大学院生）

「近世俳諧における中国詩人の受容——松尾芭蕉と陶淵明を中心に——」

MANENT MARGAUX

（立教大学大学院文学研究科史学専攻博士課程前期課程2年）

「イノベーションの国としての日本のイメージ」

・司会・コーディネーター

鈴木 彰（立教大学文学部文学科教授・日本学研究所員）

●第五十六回研究例会

「〈3・11〉後の表現を考える——演劇・サブカルチャー・文学・ドラマ——」

・日時 二〇一六年九月十七日（土） 一四時～一六時五〇分

（開場一三時三〇分）

・場所 立教大学池袋キャンパス本館二階 二二〇二教室

・内容

二〇一一年三月十一日に起こった東日本大震災から五年が過ぎ、今もなお被災地には、グラデーションを帯びたように多彩な被災状況がある。あの日から、あらゆる表現（活動／者）は、震災という事態を前に「何ができるのか」を問う声が多く聞かれ、様々な作品が発表され、議論が行なわれてきた。本企画では、「五年」という時間を視野に入れながら、「何ができるのか」ではなく、「何を表現したのか」「何が表現

されたのか」に焦点を当て、複数のジャンルからの〈3・11〉に対する視角について考えてみたい。

●講師

松本 和也（神奈川大学外国語学部准教授、日本学研究所特任研究員）
住友 直子（立教大学学校・社会教育講座教育研究コーディネーター、

日本学研究所研究員）

山田 夏樹（法政大学文学部助教、日本学研究所特任研究員）

後藤 隆基（立教大学社会学部教育研究コーディネーター、日本学研究所研究員）

金子 明雄（立教大学文学部教授、日本学研究所所員）

●プログラム

一三時三〇分

開場

一四時〜一四時一〇分

開会挨拶

一四時一〇分〜一四時四五分

金子 明雄

〔3・11〕と劇団四季

——『ユタと不思議な仲間たち』の東北巡演を視座として——

後藤 隆基

一四時四五分〜一五時二〇分

〔3・11〕とサブカルチャー表象

山田 夏樹

一五時二〇分〜一五時三〇分 休憩

一五時三〇分〜一六時〇五分

「埴谷雄高「死霊」を読み直す——〈3・11〉以後のなかで——」

住友 直子

一六時〇五分〜一六時四〇分

「坂元裕二ドラマにおける〈3・11〉

——『最高の離婚』・『いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう』を中心に——」

一六時四〇分〜一六時五〇分 閉会挨拶

松本 和也
金子 明雄

●第五十七回研究例会

「前近代東アジアにおける術数文化の伝播・展開——日本と朝鮮半島を中心として——」

●日時 二〇一六年十月二十二日（土）一四時〜一七時三〇分

●場所 立教大学池袋キャンパス五号館一階五・一二四教室

●内容

「術数」とは古代中国で成立した陰陽・五行の数理に基づく吉凶判断であり、前近代を通じて東アジアの国々に広く伝播し、それぞれの社会に深く浸透してゆくことで、それぞれの民族文化の形成にも強い影響を与えた。しかしながら、主に議論されるのは中国での形成・展開の問題であり、「術数文化」の諸国・諸地域への伝播・展開について論じられることはさほど多くはない。そのため、本例会では、このような「術数文化」を文化交流史・比較文化史の観点から検討し、日本や朝鮮半島への伝播・展開の諸相を明らかにする議論の手がかりとしたい。さらには広く「術数文化とは何か」を考える契機としていきたい。

●講師・演題

鄭 淳一（高麗大学校師範大学歴史教育科助教授）

「『新羅海賊』と国家を鎮護する神・仏」

宇野 瑞木（東京大学東洋文化研究所・日本学術振興会RPD）

「江戸初期の寺社建築空間における説話画の展開——二十四孝図を中心に」

松浦 史子（二松学舎大学文学部国文科専任講師）

「獣頭の鳳凰「吉利・富貴」について——日中韓の祥瑞関連史料を手がかりに」

・総合司会・コーディネーター

鈴木 彰（立教大学文学部文学科教授・日本学研究所所員）

・司会・趣旨説明

水口 幹記（藤女子大学文学部准教授・日本学研究所所員）

《刊行物》

『日本学研究所年報』第十四・十五号